



写楽



穰

新潮社版



© Jō Tanaka 1971, Printed in Japan

写^{しゃ} 楽^{らく}

一九七一年三月二〇日 発行
一九七四年五月二五日 四刷

定 価／七五〇円

著 者／田中^{たなか} 穰^{じょう}

発行者／佐藤亮一

印刷所／株式会社金羊社

製本所／大口製本株式会社

発行所／株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

電話 東京(03)二六〇一一一一

郵便番号 一六二

振替 東京八〇八

乱丁、落丁の本はおとりかえします。

写

楽

相手の口ぶりでは、ひどくこちらと親しい間柄の男のようなのに、皆目その正体がかめない電話に辟易^{へきえき}することがあるものだが、そのときのわたしがそうだった。

逆もどりの夏を思わせるほどの暑さに熟^うれた地下鉄を出てすぐの、西銀座にある勤め先の新聞社のデスクに、ようやくと坐りこんだばかりだったせいもある。

「中村ですよ、画家の中村ですよ」

と相手が繰返し名乗ったところで、中村直人^{なおひと}、中村善策、中村宏……と、日頃のつきあいからすぐ浮んでくる中村姓の画家はまだ数えきれないほど多いのだ。

「あんたは、美術記者の丈^{じょう}さんではないの？」

「と美術界の一部、親しい仲間に通^と用しているわたしの愛称をいって、少しばかり居直った感じの相手が、

「それなら、まさか、忘れたわけじゃないでしょう？　中村ですよ。何度も会っている日本画の中村ですよ」

というのを聞いて、はじめて、初対面^{はつたいめん}のときからこちらの内部にはいりこんでくるような、奇妙な親しさをみせた異端の画家中村正義^{まさよし}に思い当った。

「ちょっと、早急に、会いたいことがあるの。できれば、きょうのうちに、都合をつけてもらえるとありがたいんだが」

すぐに、わたしにはわかった。師の中村岳陵がくりやうにタテついたことから破門されて、ここ数年来、日本画業界全体からも追放された形でできているこのすねものに、画壇復帰の機会を計ろうとする動きが一部の新興画商たちのあいだでもちあがっている噂うわさを、わたしは聞いていたから。

——恐らく、まとまりかけているのにちがいない個展の話だろう。

美術記者であるわたしの日常は、都心の美術館や、画廊、デパートなどでの月に三百を越す展覧会から批評の対象になるいくつかを紹介するのと、一方ではさまざまな画壇づきあいから画壇の動静をさぐりだし、それを紙面に反映させることにある。従って、画家たちとのつきあいは多いのだが、それにしても、この男から個展の相談を持ち込まれるほどの深いつきあいを、わたしは持たぬ。

午後四時以後だったら、社にいと答えたわたしに、

「そう……、なら、四時から四時半ごろまでに、伺わせてもらいましょ」

といった相手が、それであっさり電話を切ろうとするのをひきとめるように、なにか特別の用件でもあるのか、とわたしはたずねた。

「会ったときに、くわしく話すけど」と相手はいい決して、「あるのよ、ちょっとした話が」

「……………?」

「写楽」

「……………!」

「新発見の写楽があるの」

「……………」

「そのときに、くわしく」

と、それでもうカチリと話線が切れる遠い音を聞いたとき、わたしは、まるで、写楽が突然にわたしのなかに貼りついてきたかのような戸惑いを感じた。

約束の時間にやってきた中村正義は、大正生れには派手すぎる白いハイネックのシャツを着ていた。表玄関の受付においていったわたしを見て、肩のバッグをかけなおすと、長髪をかきあげて、やせた血色の悪い顔をにたりとさせた。

車道の向い側のフードセンターの二階にある喫茶店まで、わたしは飄々^{ひょうひょう}と歩くかれと並んだ。

窓ぎわに一つだけ空いたボックスを見つけたが、なぜかかれはそこに坐り込むのをためらった。と、中村の横に、忽然と、樽のように肥えた、しかも背の高い大男がやってきていて、すでに坐り込んでいたわたしをたじろがせた。が、中村は当りまえの顔で、わたしの向いの椅子をその男にすすめた。

驚きは、それだけではなかった。

大男につづいて、こんどはその男の娘ほどに若い、丸ぶちの眼鏡がませた愛敬を感じさせる女がつづいて坐って、最後にゆっくりと中村がわたしの横の椅子についた。

「こちらは、好古堂の酒井さん」と中村は大男を紹介した。「なんでも酒井さんの話だと、前に

会ったことがあるそうなのよ」

いわれてわたしは、何年か以前、この男の膨大な浮世絵コレクションのヨーロッパ巡回展が文部省後援で決ったとき、それを取材しに神田の店に出掛けたことがあったのを思いだした。

「うちの酒井コレクションが、パリのギメ（美術館）に行ったときでしたな。あのときは御社で一番早く、写真まで使って出していただいで」

「こちら、奈良の女子大出の才媛さいえんの……」と中村が向いの女を紹介した。「近く、ボクが出す写楽の本のことで手伝ってもらってます」

見かけに似ず世馴れた愛想よい仕草で、どうぞよろしく、と挨拶あいさつしてくるその女に答えながら、車道に面した二階の窓ぎわに逃げようもなく押しこめてきている客たちに、ふとわたしは犯人を追いつめるとき刑事を思わせるもののしさを見た。

江戸の浮世絵師、東洲斎写楽は、あまりにも知られている。写楽が描いた役者絵版画の人物が、カナツボまなこの馬づらだったり、山芋のような長い顎をしていたり、象の足のような手がふところからゆがんでのびたりしている誇張的な表現に、現代人の心をとらえる新しさがあることも、最近の異常なまでの写楽ブームの要因と見られる。

しかも、写楽については、それら役者似顔絵や、相撲絵の版画約百四十種を、いまから約百七十年まえの寛政六年から七年にかけて描いた事実があるだけで、伝記的な文献上の記録は皆無に近い。わずかに、俗称を斎藤十郎兵衛といい、江戸の八丁堀に住み、いまの徳島県、阿波あわの藩主蜂須賀侯おかえの能役者だったらしいことが推測されるくらいで、これさえも戦後進んだ研究ではあやしくなってきた。

そのためか、ナゾの写楽を同時代に活躍した別の絵師その他に結びつける臆測が、春を迎えて咲き乱れる花のように競いあい、

——写楽は、実は、若き日の北斎の仮の姿だった。

——いや、写楽は、当時の幕府の御用画家円山応挙だった。

——とんでもない、写楽こそ、無名の歌麿を起用して美人画をかかせた浮世絵出版社、つたず蔦屋耕書堂のアルジ、蔦屋重三郎にほかならなかった……。

とかいった写楽別人説が、まだほかにも数えあげたらきりがなくらい唱えられはじめている現状である。

二、三年ぶりに、いま意表をつく現われ方をし、なおさりげなくその本の出版をいつてのけている中村正義も、阿波徳島の蜂須賀侯に仕えた当時のまきんし蒔絵師と写楽を結びつける、写楽蒔絵師説の主唱者にはかならないのだ。

明らかに売りこみとわかる、こうした記事の内容というと、決つてのようにはたわいないものか、利害関係が複雑にからむものでしかないこれまでの経験から、わたしはいささかの困惑を感じながらも、写楽についてのどんな新しいナゾが飛び出すことになるのか、ある期待を持った。

「酒井さんと一緒に、こうしてやってきたのも、実は、酒井さんの希望で。ボクは橋渡しをしてるだけなの」

と中村がしゃべりだすと、大男の酒井好古堂は照れたように禿げあがった頭をかいて、口元に人のいい笑みを浮べた。

「酒井さんは、珍しい軸を持っていられる。浮世絵研究家のあいだで、かなりまえから、写楽と

の関連が取沙汰されていた軸なのに、この人はひどくのんびりと構えて、ながいこと蔵の中に放りこんだままでこられた」

「のんびりしていたわけでは、決してないんですがね……」と好古堂はいいながら、ボーイの運んできたおしぼりを取りあげると、額に吹きでていた汗の粒をぬぐった。

「こんど、ボクが写楽の本を出すでしょ。それに使う写真を撮らせてもらいに日参してるあいだに、この人はようやくその軸の貴重さに気づかれた。すると、いつからか気持が変って、どこか大新聞のニュースになったあとでなくては、お前の本の写楽に使わせるわけにはいかぬ、とそういうことになってきた」

そうでしたね？ と念を押すかに見上げた中村に、好古堂はきまじめにうなずく。

「新聞なら、酒井さんは、どうしてもお宅。酒井コレクションのヨーロッパ巡回展でも世話になったままだから、とおっしゃる。お宅へ行くのなら、美術記者の丈氏をボクがよく知っているから、社会部に持ちこむまえにまず一緒に相談してみようということになって、こうして雁首がんびを揃えたわけなんだけど。とにかく、現物を見てもらう方が話は早い。ねえ、酒井さん？」

「……………」

「そうしようじゃないですか、え、どうです？」

繰返し問われて、まるで急所を突かれたようにわれにかえった巨漢の好人物は、あわてて膝の上の風呂敷包みの結び目をほどこにかかった。

むっちりとして、柔らかな赤子のそれを連想させる肉づきをした好古堂の手と、その手の運びの慎重さにわたしは吸いこまれながら、幾重にもまかれた薄い真綿に似た和紙の中からむき

だされてゆく古めかしい軸を見た。

それを好古堂は、水の入ったコップとおしぼりを脇に寄せたあとの卓の上に、まへのわたしがよく見える向きにひろげた。

幅が約三十センチ、長さが一メートル近い掛軸であった。唐草模様の緞子仕立ての縁はかなりすりきれていたが、上半分に五行にわたる画賛の入った肖像画そのものは、長い保存のよさがわかる雅趣を持つ作品であった。

肖像の男は、老人だが嬰鑠かくよくとしていた。

紋付の羽織の紐をゆったりと垂らし、脇息きょうそくに左手をおいた格好で、背後の刀かけにひとふりの長刀がかけられていることから、男が苗字帯刀みょうじたいとうを許された格の高い町人らしいことがわかった。

——絵全体から受ける印象は、いわゆる写楽の役者絵とはちがう。

——が、作風はちがいがながら、この絵とそっくりな写楽の描く老人の顔を、いつか、なにかで見た記憶が、たしかにあるのだから……。

「思いださんですかなあ」

そういって、しばらく待った中村正義が、つと卓の足元に置いたバッグからまるで切札をとりだすように、キャビネ大の一枚の写真を突き出したときだった。わたしは、思わず息を詰めた。

わたしの目の前にひろげられている肖像画の老人の顔は、キャビネ大の写真の写楽画のサインのあるあまりにも知られたこの扇面の老人とそっくりなのだ。

しかも、写真のこの扇は、昭和初年に東京で発見されながら以後ぶつりと行方が知れずきたのを、四年ほどまえにはかならず中村正義の執拗な探索で三重みえに所在がつきとめられて、写真入

りで大きく朝日紙上に紹介されたことがあった。

「これも、中村探偵の発掘でしたな」

わたしはそういって、明らかに朝日に掲載されたものの複写とわかる写真を、隣の中村に返した。「そして、こんどがまた、二度目の金星^{きんぼし}というわけですか」

「とんでもない」と中村は打ち消した。「あの三重の扇も、これも、まえまえから見つかっていったものの所在と内容を明らかにしただけ。本来なら、こういうことは、われわれ絵かきがやることじゃなくって、美術史の学者のやることなのよ。それを専門家がだらしなくて見てはいられないから、ついこっちが動くことになる」

「古くから、これは、酒井さんのコレクションに入っていたのですか？」

「比較的最近。そうでしたね、酒井さん。終戦後、まもなくのような話でしたね？」

と中村が、黙りがちだった酒井好古堂にたずねた。

「戦後の、(昭和)二十三、四年のことでしたなあ。四日市だったか、桑名だったか、どっちかの私鉄の駅前通りを歩きはじめたばかりのときでしたなあ……」

すでに二十年にもなって、どうしてもつながらない部分があるというどさくさ時代の遠い記憶を、好古堂はボソリボソリとたどりはじめた。

終戦は、一般庶民の生活をどん底の悲慘に突き落したのと同時に、長い繁栄の夢をむさぼりつづけた貴族階級にも、急激な斜陽化を強^しいた。かれらは、やむなく伝来の家宝も売り払わざるを

えなかったから、書画骨董を扱う古道具業界には秘蔵の名品が出回った。明治維新や、関東震災後をしのぐ空前絶後の活況が市場にみなぎっていた、まさに絶好のときだった。

酒井好古堂は、江戸末以来五代にわたる浮世絵の収集家である。ひょんなところから、ひよんな珍品が掘り出せる期待を持って、そのときも大阪界隈の古道具屋を歩きまわったが、たいした獲物にもありつけずに終ったその帰りの途上であった。大阪発の急行に乗りこんでいた好古堂は、急にお伊勢参りを思いつくと名古屋でおりて、私鉄に乗りかえた。

五代目好古堂は信心深い。ごみ箱のごみ屑なみに混雑した電車も苦にはならぬ。が、途中の駅で、吐き出た人波にさからいながらもホームに押し出されて、そのすきをたちまち埋めつくしてなお入りきらずにいる乗客の後に立たされたときだった。二人分近い空間を必要とする図体の好古堂は、思いなおした。お伊勢さんには、お参りするつもりになった殊勝さでごかんべん願って、せっかく来たついでだから、ちょっとばかり商売をさせていただこう。

気も、足も向くまま降りたのだから、そこが桑名だったか、四日市だったかはっきりしない。しかし、駅前通りの、当時どこの町にも群生したブラック建ての闇市の中の、古道具屋だったことはたしかだという。

その店頭には、洗濯石鹸や、軍手や、旧軍隊の将校用の長靴などがごっちゃに並んでいた。にぶい日ざしの奥の板ばりの壁に、何本かの掛軸が下げられていて、その中央の一つが、それはいいともさりげなく、ささやくように、好古堂を呼んでいた。

佳品は、招くに価する人間だけを招く。その目さえ持つなら、こっちは黙っていても、品物の方から、おいでおいでと囁いてくる――。

近づいて、よく見た好古堂は、内心はくそ笑んで、これこそ伊勢さんのご利益だ、と思った。縁も、画賛も、肖像の絵もふくめた軸全体の備える気品が、なんともいえない。

緞子仕立てのへりの唐草模様と、肖像画の人物が敷いている座ぶとん風の敷物のさらさ模様が、江戸寛政期の流行にびったり合致しているのもいい。

へりがすり切れているのは、それだけ頻度多く鑑賞家の目をくぐった証拠で、破損が肝心の絵に及んでいないのはうれしい。

へみづからおのれがかたちに題してゝで始まる五行の画賛の、つぎの行が、

へうつされてわれに あふみのかのみやまゝ

とあり、最後の一行に書かれた年月日と署名が、

へ寛政六甲寅仲春 一陽井素外六十一歳

とあるのも、恐らく、一陽井素外が自分の還暦の祝いを迎えることでもあったろう。自分の知りあいのなにものかの絵師におのれの肖像をかかせ、そうしてできあがってきた絵にみづから賛を書きこんでいたのにちがいない背後事情がくっきりとわかって、これまた文学的にみても面白い。

素外は、享保に生れて文政年間に死んだ江戸屈指の俳人である。苗字は谷で、一陽井の号があったことも、商売が俳句にも心得のある好古堂は知っていた。

「いくらするねえ、ここにある軸は？」

いともさりげなく、どうあってもそれだけは手に入れたい気持はびたりとかくして、売りものの茶だんすの横で股火鉢にあたっていた親父にたずねた。

「八十円均一とこだな。けど、二本以上だったら、まけまっせ」

「一本でええわい」

「どれに、しましょ」

「それぞれ、まんなかの」

短く肥えた指を突きだした好古堂は、ようやくにして、この旅での唯一の掘り出しものにありつけたとは思ったが、まさかこのとき、二十年後の大事件をひきおこす写楽の肉筆画がころがりこんでいたとは、夢想だになかった。

「驚きましたなあ。誰にしても谷素外の肖像とは読めても、これから写楽が飛びだすなんてことは、まかりまちがっても想像できませんでしたからねえ。」

三、四年まえでしたか。中村さんの追跡調査で、写楽のあの肉筆扇面画がさがれたときに、うちの素外がどこか似てるのを思いだしてすぐ蔵から捜し出して、その後、うちに見える先生方にお見せしたことがあった。皆さん、一応は、よく似てるとはいわれていたんだが、それにしても、実際の話がですよ。谷素外を写楽がかいていたなんて、到底信じられませんか。やいのやいの中村さんから撮影を催促されるつい最近まで、本気にはできませんでしたからねえ」

「で、いまは勿論、写楽だと確信されているんでしょうね？」

わたしは、興奮にまるい顔いちめんを紅潮させている好古堂を見た。

「勿論、勿論ですとも。これは、まちがいになく写楽がかいたものとわかりました」

「……………」

「浮世絵研究家の高見沢（忠雄）さんも、近く改めてうちの素外を見てくれることになってます

し、いま日本にいる外人の浮世絵研究家で、パカードという男がいるでしょ。あれなどは、うちの写楽を手にとってくらいつくように覗きこんで、どうです、手も体もぶるぶるふるわせて、これはすばらしい……」

「……………」

「誰が見ても、絶対にまちがいないですな。ここにいる中村さんも……」

いわれた中村が、まるで写楽版画の大首絵おおくびえに描かれた、あの評判の悪役、坂田半五郎のうすくゆがめた口元のような、皮肉な笑みをちらりと浮べたのに、一瞬、

——待てよ

とわたしは考えた。

——中村正義が追跡調査した世には稀な三重の肉筆扇面画も、写楽画のサインはありながら、確実に写楽が描いたものという学問的な裏づけは、まだなんらなされていないはずなのだ。

ボーイの手でコーヒーが運ばれてきた。四つが卓の上に並べられてゆくあいだ、わたしはキャビネ大に複写された三重の扇を覗きこんだ。

その中央には、たしかに好古堂の軸の人物と似た顔の老人の上半身が描かれている。人物の右側には桃太郎のような人形が立っていて、その足は豊国のサインの入った役者絵風やくしやえだこを踏まえている。写楽より遅れて浮世絵界の流行児になった豊国の絵が、その扇の絵の中に使われているとすると、この扇が描かれたのは、